

新しい価値を創造する ～見方を変えることで価値に気付く学習～

藤原一恵

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: fujiiwara_kz@tottori-u.ac.jp

FUJIWARA Kazue (Tottori University Junior High School): Create new value— Learning to recognize value by changing perspectives.

要旨 — 新しい環境で学ぶ生徒が、自分の通う学校についてグループで調査をし、新聞作成を行った。新しい事実を発見するだけでなく、気づかなかった学校の魅力をたくさん見出すことができた。新しい価値に気づいたことで、今後の中学校生活や学習について、意欲向上を図ることができた。

キーワード — 新しい価値の創造, グループ学習, 多角的な視点, 学習意欲の向上,

Abstract — Students in a new environment conducted group research and created a newspaper about their school. Not only did they discover new facts, but they also found out many attractive points that they had not noticed before. The students were able to improve their motivation for their future life and study in junior high school by discovering new values.

Key words — Creation of new value, Group Study, Multifaceted Perspectives, Increased motivation to learn

1. はじめに

1.1. 教科としての課題

平成 29 年の学習指導要領の改訂以降、先のわからない社会を生き抜くために必要な力として、言葉の力、多様性を育てることを目指した授業づくりを行ってきた。更に近年、AIによる多方面での活用開拓が進む中、世の中は多くの情報を活用し、様々なものの見方と価値観を変えているように感じられる。たとえば、既存のものに新しい価値を見つけ、それをビジネスに活かすような例がニュースで取り上げられている。単なるひらめきが成功をもたらした美談のように思われるかもしれないが、「新しい価値」を見出すには、多角的な視点で物事を捉え、多様な意見を生み出す力が必要である。未来を生き抜いていく子どもたちにも、今まであったものに新しい価値を見つける視点や、多様に考える経験が必要なのではないかと考えた。

しかし「新しい価値」を創造するためには、できるだけ多様な考えに触れることと、誰もが当たり前だと思っていた見方を覆し、様々なものに可能性を見出すことによって認められる経験が、まず必要なのだと考える。国語の授業の中では、特にグループ活動を中心とした多様に考えたり伝え合ったり

する言語活動を通して、新しい価値を創造していく経験を重ねていくことが大切だと考える。

1.2. 生徒の実態と課題

本年度担当したのは、元気よく声の出る1年生である。コロナ生活の影響で、マスク着用・黙食・大声を出す活動の制限を経験していたが、それもなくなり、のびのびと毎日を過ごせる生徒たちは思いついたことをよく考える前に発言する。そして、その活発さ故、グループでの話し合いは大変熱心に行っている。

そして、多様な意見を出し合うことを楽しめる関係がある。大人が気づけない感覚で課題に対する意見を出すことに驚かされることも多々ある。だからこそ、今までの「当然」や「普通」が、違う目を通してみると、「魅力」として感じられる体験をさせたいと考えた。そしてこの学習を通して、自分の発見や意見が「いいね」と認められることで、表現することや学校生活自体に自信や安心感を持って望めるようにしたいと考えた。

また、生徒達は受験をして本校に入学してきた。公立学校へ進学するのと違って、「親に勧められて」「附小にいたから当たり前のことだと思って」受験したという生徒が半数近くあった。その生徒たち

が、自分の学校について知らなかった魅力に気づき、ここで学ぶことに対して目標を持ち、より前向きに取り組むことができることを期待して、本単元を設定した。

2 研究の目的

調べたことをもとに、新たな学校の魅力を互いに発信する学習を通して、より多くの魅力を発見できることを明らかにする。さらにこの学習によって、自校の歴史や伝統に誇りを持ち、仲間と共により意欲的に学ぶ姿勢を育てる効果を図る。

3 研究の内容（実践の内容）

単元学習「〇〇を見る目」

～見え方を変えることで価値に気付く～

1. 単元の目標～学習活動の中の「やりくり」～

・多様な見方を通して物事の新しい価値に気付く、それらを自分の生活に活かすことができる。

(1) 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。〔知識および技能〕

(2) 相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫すること。〔思考・判断・表現〕

(3) 根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。〔思考・判断・表現〕

2. 単元における言語活動と評価基準

(1) 言語活動

ア 紹介や報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて質問したり意見などを述べたりする活動

ウ 本や資料から文章や図表などを引用して説明したり記録したりするなど、事実やそれをもとに考えたことを書く活動

(2) 評価規準

【知識・技能】

② 比較や分類、関連づけなど情報の整理の仕方引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと (2) イ

【思考・判断・表現】

①相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫すること A (1) ウ

① 根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること (1) ウ

【主体的に学習に取り組む態度】

調べたり聞いたりしたことから多様な考えを持ち、新しい視点で捉えたことを自分の言葉で書くことができる。

3. 学習計画(全14時間)

第1次「オオカミを見る目」高槻成紀 (全3時間)

・調べたことを整理し、新聞の構成を考える
・文章の構成を捉えながら筆者の考えを捉えよう

・物事は見方が変わるだけで、印象が大きく変わることがあることに気づく

第2次「附中を見る目」

① 学習の見通しを持つ

② 作文「附中を見る目 その1」を書く

③ 「新聞づくり」

・「附中」について調べたいことと、調べる方法を決める

・必要なことを決め、調べたことを記録する
・新聞にまとめる

④ 新聞鑑賞会

⑤ 作文「附中を見る目 その2」を書く

○「新聞づくり」について

グループで決めた観点について、調べたことを新聞にまとめる活動を設定した。「学校行事について」「部活動について」「修学旅行について」「給食について」「コロナ禍での中学校について」など、大まかにいえばこのような観点をそれぞれの興味関心に合わせて調べることとした。

しかし、生徒たちが当てにしていたインターネットでは全く必要な情報が得られなかった。過去の卒業アルバムや、懇話会広報誌、「生徒活動の歩み」(生徒活動記録集)を何十年分もさかのぼって調べていく必要があった。これには予想外に時間を要した。だが、白黒の写真や、茶色く変色した広報誌を丁寧に読みながらたくさんの発見をした。何かとインターネットに頼って情報を得る生活をしている生徒たちにとっては、手間をかけながら丁寧に資料を読み込んでいく貴重な学習となった。今では想像がつかないような昔の中学校生活について、真剣に写真資料を見たり、記事や文集に書かれた先輩方の言葉をじっくりと読んだりすることか

ら、驚かされることをたくさん見つけた。

調べたことを「新聞」としてまとめるにあたり、生徒たちには他のグループが調べていない観点での記事がよいこと、人が知らない情報が必要なのでたくさんの人が「へえ〜」と驚く事実が良いことを確認し、グループで協力して調べた。何かに気付いても「それって、『へえ〜』って思ってもらえる？」と立ち止まって考えながら、記事を作成していた。(図 1)

図 1 生徒の新聞

4 実践践の考察

4.1 生徒の姿容

附中について調べる前に、「附中を見る目 その 1」として、入学後の附属中学校のはじめのイメージと入学後に気づいた附中の魅力を作文にした。そこで挙げた印象を集約したところ、「黙々と勉強するところだと思っていた」「クラスの友達もまじめで、先輩や先生も厳しくて怖そう」というイメージが強かったこと、実際に生活してみると「個性的な人がたくさんいる」「勉強が大事な印象は強いけど、話をする場面では活発に意見が出るし、前向きに頑張る人が多い」と感じていることが分かった。入学して1か月ほど経ち、学校生活が本格的に始まり、授業や行事への取り組み、部活や委員会活

動などの他学年との交流を通して、「怖い」という印象は変わっていることが分かった。2 クラス分の生徒作文に書かれた意見をリストアップし、分類したものを以下に示す。(図 2: 数字は回答数、複数回答あり)

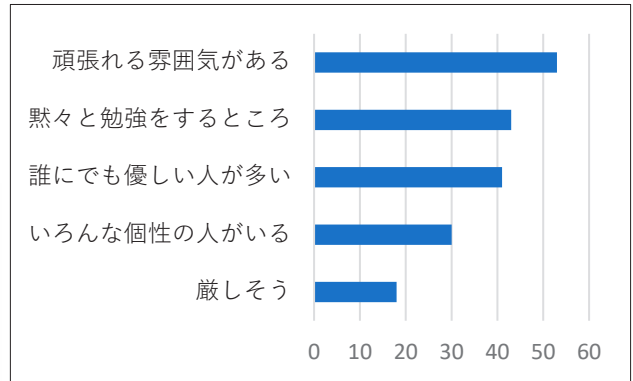


図 2 附中を見る目 その 1

また、単元の終わりに「附中を見る目 その 2」を書かせた。そこには、「その 1」にはない多様な視点からの附中の魅力が書かれていた。その特徴を以下に示す。

特徴①学校の歴史(行事・部活・学習・先輩)について新しく知ったこと

- その当時の情勢などによって、修学旅行先が変わったり、なくなったりすることもあったことが分かった。
- コロナなどの影響でなくなってしまった行事を復活させたい。
- 石破総理をはじめとして、活躍している先輩がおられることは知らなかったのが驚いたし、うれしかった。
- 大学体験や、国際交流事業など他の学校では体験できない学習があるので楽しんだ。
- 文化祭では『山のいぶき』が40年以上も歌われているのに驚いた。
- 自分の所属している部活は、たくさんの素晴らしい結果を残していてすごいと思ったし、自分も頑張りたいと思った。
- 以前の運動会の種目には徒競走や仮装競走などの楽しそうなものがたくさんあって、僕たちもやりたいと思った。
- 附中ができたころには部活や同好会などたくさんの部活やクラブがあってとても楽しそうだった。でも、今は働き方改革で少なくなっているのが残念だ。

特徴②先輩方の思いについての気づき

- ・今までの先輩たちががんばってきたから、今の附中があるのだと思うと、自分も先輩たちのように頑張りたいし、楽しみたいと思った。
- ・ずっと伝統を大切にしているし、新しいことにも挑戦している学校なんだとわかった。
- ・昔のアルバムなどの先輩方の写真を見るととても楽しそうにしている、昔の先輩は附中に来て楽しかったんだなと思ったし、私も3年になった時にそんな風を感じられたらいいなと思った。

今後の中学校生活を前向きに楽しみたいという意欲を持った生徒が多かった。

特徴③クラスの友達から学んだこと

- ・他のグループは細かく調べてからグラフにまとめていてすごいと思った。
- ・〇〇さんの記事がとても上手に書かれていて、自分もそんな表現ができるようになりたいと思った。
- ・「あのグループは△△さんが、あのグループは□□さんがまとめ役をしているな」とか、「〇〇さんは資料を進んで集めていていいな」とか、クラスの人すごいところがわかった。

更に、グループ学習や他グループの新聞を読んだことで、何に注目して調べたのかという観点のユニークさや、新聞の構成・文章力に感心したという意見も多く見られた。

①～③の特徴以外にも、長い歴史の中で学校が変化してきていることや、そこで力いっぱい青春を謳歌していた先輩の姿を想像し、自分のこれからの中学校生活に期待や目標を持ったことの記述が多く見られた。

また、グループ学習を通して、グループの仲間と今まで以上に気兼ねなく話せるようになり、他のグループの新聞を読む際も気づいたことを活発に発言し合う姿が見られるようになった。

これは、なるべくたくさんの方から新しい価値を見つけていくために必要な関係であるため、大変嬉しい変化だった。ふと思いついてつぶやいたことやちょっとしたひらめきが、新しい価値を創造

することにつながるからだ。

その効果もあり、学習の最後に書いた「附中を見る目 その2」には、当時の中学生が思っていなかったであろう附属中学校の魅力を多く発見できたと考えられる。そして「変わらない伝統」を自分たちも受け継ぎ、中学校生活を充実したものにしていきたいという希望を持った生徒が多かった。「その1」と同様に生徒作文の意見をまとめたものを以下に示す。(図3)

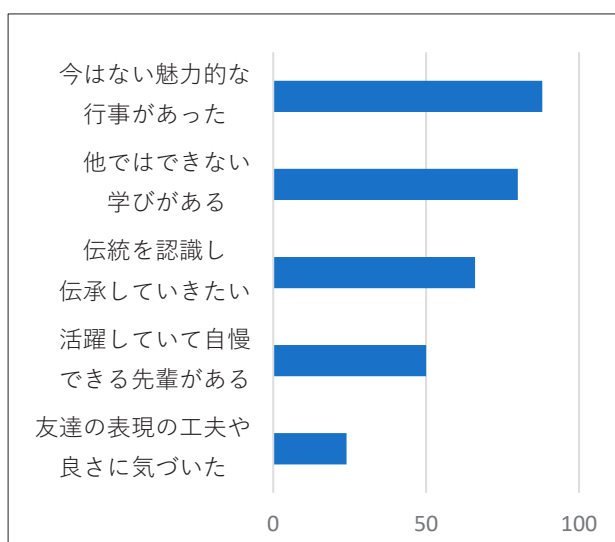


図3 附中を見る目 その2

4.2 単元の考察

本単元では、自分が通っている学校について歴史や行事などの変化などを知ることを通して、多くの魅力を発見できるように学習内容を設定した。

そして、学習を終えた後、自分の学校に多くの人に関わってつながってきたことを知り、そのつながりの中に自分がいることも感じられたなら、これからの中学校生活に目標や意欲を今まで以上に持てることを期待していた。

また、調べた事実について当時の世の中の事情や先輩の気持ちを想像して「なぜ修学旅行先がかわったのか」「職場体験は楽しそうだけど、仕事の内容や日程を知ると大変そうだった」と、自分たちなりの捉え方ができると、今の学習や日々の生活・学校行事の意義を感じ取り、前向きな姿勢がみられることも期待していた。予想以上に調べる作業が大変であったが、生徒は資料を手

分けして調べ、当時の先生や生徒のコメントや、生徒数の推移や、各年の運動会種目などの細かな情報を効率よく集めていた。ネットの情報や、デジタルデータが全くない中の調べ学習であったが、資料をていねいに読み込んだり、顔を寄せ合って卒業アルバムの写真をのぞき込んでいる姿は、いつでも手軽に画面で調べられる今の情報収集と逆行していて、私としてはあたたかいものを感じられてよかった。

学習の始めと最後に書かせた作文には、「附中はどんな学校なのか」自分なりに気づいたことを挙げていた。「その1」では「厳しい真面目な学校だと思っていたが、個性的な人が多く、優しい人も多いので安心した。」といった意見が多かった。しかし、学習の終わりに書いた附中を見る目「その2」には、多様な魅力を挙げてくれていた。「文化祭や運動会」というくりだけでなく、「1994年の運動会には仮装競争があって、衣装は生徒が作っていたらしい。今以上に生徒に自主性があると思った」というような具体的なエピソードを知って、当時の生徒の様子をイメージした生徒が多かった。

学習開始時(その1)に書かれた「魅力に感じたこと」の視点の数が0～2個の生徒群と3個以上の生徒群に分け、学習終了時(その2)の視点の数を集計した。(表1)

	学習開始時	学習終了時
視点が0～2	6	0
視点が3～	0	27

単位:人,p<0.01(マクマネー検定)

その結果、全ての生徒が学習のはじめより、附中の魅力を多く発見していることがわかった。また、数十年前の中学校生活の現代にはないおもしろさをうらやましく感じたり、現代は学習環境が整っていることを当たり前だと思っていたことが間違っていたと知ったり、新しい価値観を手に入れた目で、これからの学校生活をより前向きに取り組んでいこうという意欲を高める効果も読み取れた。

学習の成果から、自分の学校について調べるとい学習活動は生徒の意欲や効果を高めることが

できる良い活動であったことがうかがえる。

5 まとめと今後の課題

新聞づくりを通して、生徒の学びの様子に多くの変化が見られた。学習中では、グループで協力する姿、資料の準備や片付けを担当以外の生徒が率先して手伝う姿など生徒同士のあたたかい関わりが増えていた。

また、学校行事が先輩方の思いと一緒につながって行われてきたことを実感して全力で合唱する姿や、進んでリーダーの役に挑戦する姿など、「取り組む姿勢」を受け継いでいこうとする行動が見られた。

様々な視点で「物事を見る」ことを通して、そのものの新しい価値を創造するだけでなく、新しい価値に気づいた者が、より意欲的になれることは予想以上の成果であった。

さらに、1年生が学習する文学作品「少年の日の思い出」の初発の感想で少年の日の思い出」初発の感想で単純な登場人物の印象にとらわれることなく、「エーミールは大人っぽい人だと思った」「エーミールは正しいことしか言っていない」といった感想が、今までよりも多くあった印象を受けた。多角的に物事を考える視点が備わっていることの現れだと期待する。

今後も、多角的に見て考えることで多様な価値に気づけるような学習活動を取り入れていきたい。2年次、3年次に同じ教材でどのような感想意見を持ったのかを過去の記録と比較していくことで、その成果や課題をさらに研究していきたいと思う。

参考文献

- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)文部科学省